

## 第 82 回 歴史リレー講座「聖徳太子はお待ちです」 近藤 本龍氏 (R3.7.18)

このたび、私ども叡福寺では聖徳太子様の 1400 年ご遠忌の御法要と奉納行事を 4 月 10 日の開白式から 5 月 11 日の結願式までの 32 日間にわたって肅々と勤めさせていただきました。この間、雅楽や狂言、能などさまざまな芸能が奉納されました。管主の私といたしましても、今回参拝された人々が太子様の御心を連綿と受け継いでおられることに改めて気づかされ、心にしみた次第です。

本日は叡福寺に伝わる御傳絵（障子図）に沿って太子様の生涯をお話ししましょう。これらは昭和 16 年ごろの宗教画家小早川好古こうこの筆によるものです。画伯は明治 21 年生まれ、鳥取県の寺で得度ののち、京都で絵師の修業に励みました。紙芝居や子供向け漫画に至るまで幅広い作品を手がけています。まずは敏達 3 年（574）の「御誕生」から。太子様は異母兄妹である用明天皇と穴穂部間人皇女あなほへのはしひとのひめみこの間に第一皇子として誕生。そして、早や 2 歳で東に向かい合掌し、「南無佛」と唱えられたことは非常に意義深いことです。のちに太子様が研究されることになる法華経に、「心が乱れたときには塔あるいは廟に入り、南無佛と一度唱えるだけで菩提（悟り）へと向かうことができる」と書かれているからです。

「御孝養」の絵では、十代の太子様が用明天皇の病氣平癒を観音菩薩に祈願されています。崩御後は皇位継承問題が勃発、崇峻天皇の即位をきっかけに武力にたけた物部氏との争いが始まります。蘇我軍として参戦した太子様は勝利すれば寺を建立すると祈願。血で血を洗う戦いは蘇我軍の勝利に終わりました。しかし、蘇我馬子の刺客によって崇峻天皇が暗殺され、推古天皇が即位（593 年）。その際、摂政として白羽の矢が立ったのは天皇の息子竹田皇子ではなく太子様でした。よほど聡明さと政治能力を買われたのでしょう。太子様は就任後すぐさま「三宝興隆の詔」を発令。難波の地に四天王寺を建立し、仏法の根本道場である寺を中心とする社会福祉事業に着手します。迎賓館としての役割も備えた寺の周辺には四箇院と呼ばれる 4 つの施設（敬田院＝寺院、悲田院＝福祉施設、療病院＝病院、施薬院＝薬局）を創設。さらには学問を学ぶ場所も充実させました。こういった精神は現代にも引き継がれています。

太子様は飛鳥と難波を結ぶ道を推古天皇とともに整備しました。近年、日本遺産に認定された竹内街道がそうです。この道を人々が行き交い、大陸文化が難波を経て飛鳥に伝わったのです。推古天皇 8 年（600）、太子様は甲斐の国から献上された黒駒で全国行脚に出発。国境の確認や地方の視察に加え、自身の墓所選定が目的だったといわれます。その後、太子様は敏達天皇と用明天皇が眠る磯長しながの地に墓所を求められました。

さて、当時の大陸の国家観は「国には法と人材登用制度が確立されているべき」というもの。そこで、太子様は「十七條憲法」と、能力重視の登用制度「冠位十二階」を制定。ちなみに、同憲法第二条にある「篤く三宝を敬え」の三宝とはもちろん「仏法僧」のことですが、自然に感謝する神道（根幹）、孔子の教えである儒教（枝葉）、そして釈迦が説いた仏教（果実）を表わすという考え方もあります。

「御講讃」の絵では 606 年、推古天皇らに勝鬘しょうまんぶにん経（勝鬘夫人が説いた経）を解説する姿が見られます。初期の仏教と違い、大乘仏教の根幹は「山川草木悉皆成仏」さんせんそうもくしつかいじょうぶつ。この世のいかなるものも仏になれるという大きな視点に立っています。したがって、女性の経を初の女帝に解説する意義は大きかったはずです。その後、仏教学者でもある太子様は勝鬘経、法華経、維摩経を解説した『三経義疏』さんぎょうぎしょを著しています。

「遣隋使渡航」の絵は 607 年、小野妹子を隋に派遣する際の様子です。太子様は親書で国家としての日本を皇帝に強くアピールしました。そして、推古 30 年（622）の太子様葬送の情景を描いた「薨去」は、人々が深く悲しみ嘆く様子が印象的です。太子様は前日に亡くなった夫人とともに母の眠る磯長の地に葬られました（三骨一廟）。時は移り、空海や親鸞、日蓮らもこの廟を訪れて自身の進むべき道を見い出されました。日本文化の祖、太子様こそ私たちが敬い慕うべき偉人です。どうぞ、みなさまも日常の悲喜こもごもを太子様のお墓の前で吐き出し、明日への糧として下さい。太子様とともにお待ちしています。